

## 平成 29 年度 地域貢献事業活動報告書

1 事業名称	地域資源を授業にいかすためのワークショップ ～2017 年は「生活と手仕事」を考える家庭科～
2 事業推進者等	(責任者職名・氏名) 准教授・佐藤ゆかり
3 学外の連携機関等	(連携機関等名) フリー刺繍作家, 家族福祉・生活文化研究所 (担当者職名・氏名) 昭和女子大学名誉教授 天野寛子氏 (連携機関等名) 日本家庭科教育学会北陸地区会第 34 回大会
4 事業の趣旨・目的	<p>前回は「生活」と「技術」であり, 生活の中の道具と生活に関わる科学技術の可能性をテーマとして事業を行った。</p> <p>第 7 回を迎える本事業のキーワードは「手仕事」である。</p> <p>21 世紀は不安定で, 不確実で, 複雑で曖昧な時代といわれている。この混乱しそうで, 翻弄されそうで, ともすると心をざわつかせる時代において, 改めて「手仕事」というものについて問い直したいと考えた。</p> <p>そこで本事業では, 実際に技術を行う「人間の手仕事」に着目し, 手仕事と生活, そして学校教育について考える機会とした。</p>
5 事業活動報告	<p>以下の 3 事業を実施した。</p> <p><b>事業 1: 天野寛子氏 フリー刺繍展</b></p> <p>日時: 7 月 29 日 (土) 14:00～16:00, 7 月 30 日 (日) 9:30～16:00, 7 月 31 日 (月) 9:30～16:00</p> <p>場所: 上越教育大学大学会館 2 階 POTATO</p> <p>参加者数等: 上越市内外及び県外から, 10 代～60 代約 140 名。 参加者の感想 (一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・細かい文字も刺繍されていてすごかったです。(20 代男性上越市)</li> <li>・今回の展示会では以前, 書籍にて拝見した作品を実際に見ることができて良かったです。お針子はあまりしない人間でしたが, 今回作品を見て刺繍のイメージが大きく変えられました。作品の一つ一つが詩のように力強く雄弁に語っているのを感じ, また, 同時に刺繍によってこのような作品を作ることにもできるのかと驚かされました。どうかこれからも多くの素敵な作品を作ってほしいです。今回は展示会を催して下さい, ありがとうございました。(20 代男性上越市)</li> <li>・花火を刺繍で表したものがきれいだったので, まねして作ってみたいと思った。絵を描いているのですが, 自分の描いた絵と刺繍を組み合わせたものをつくるのもおもしろそうだと思います。ステキな作品をありがとうございました。</li> </ul> <p>世間に対してイメージを発しているところ, 共感しました。花火, 3.11 水, はぎれのこと, 身近なところをテーマにしている。ししゅうもかわいらしい。手仕事について考えさせられました。(20 代女性上越市)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全て手ぬいと聞き, 驚いた。とても素敵なものを見せていただいてよかったです。私も手芸が好きなので見ているだけでワクワクする。(50 代女性上越市)</li> </ul>

・今まで見たことのない刺繍でした。芸術作品として素晴らしいと思いました。身近な手芸からこのような世界に広がりがあるということを知り、よくいわれるイノベーション的なことともつながると感じました。ありがとうございました。(40代女性上越市)

・刺繍というと「糸で線描をつくっていく」というイメージだったのですが、フリー刺繍はこういった表現もあるのだと驚きと感動の連続でした。文字も描けるだなんて、本当に驚きです。「窓」の描写がとてもナイーブで素敵でした。線の上からさらにオーガンジー？を重ねるわがが綺麗でした。光っているようにみえて、まるで陽の光が窓に入ってくる、日常にあるけれどそれをととても丁寧に感動的に描いていて大好きな作品です。(20代女性上越市外)

・刺繍の奥深さに驚きました。素材のテクスチュア、線の自由なこと、平面なのに奥行きがあり、何といても文字を刺すことで文章が文章以上のものに変貌していくと感じました。手仕事の大きさを知り、その上で造形デザイン設計につながることを願っています。(特に若い世代の方々に)(60代女性上越市)

・刺繍のイメージが変わりました。メッセージ性もあり、写真や絵画以上のものが伝わりました。(60代女性上越市)

(11)

東日本大震災  
題材の作品展示  
刺しゅう作家の  
天野寛子さん  
昭和女子大名誉教授  
でフリー刺しゅう作家  
の天野寛子さんによる  
刺しゅう展がこのほ  
ど、上越教育大・大学  
会館2階のPOTAT  
Oで開かれた。  
同大学公募型地域貢  
献事業・地域素材を授  
業に生かすためのワー  
クショップ2017の  
一環。7回目の今回は  
「生活と手仕事」を  
テーマに、東日本大震  
災に関する報道記事な  
どを題材に刺しゅう作  
品に取り組む天野さん  
を迎えた。展示作品  
は、天野さんの画集  
「繋ぐ」からと、新作  
を合わせた21点。震災  
を記録した新聞が、い  
ずれごみになっていく  
ことに対し「やりきれ  
ない不安感を感じた」  
という天野さん。「忘  
れちゃだめだ」という  
思いから記録としての  
作品作りに取り組ん  
でいる。



手前は転覆した船や爆発した福島第一原発、避難  
所で生活する人々の姿などを1枚にまとめた作  
品。新聞記事・写真を引用している

上越タイムス 2017年8月10日付

## 事業2：公開シンポジウム

### 布に触れ、布に関わり子どもは何を感じ、何を刻むのか 「家庭科の授業で〈つくる〉」のこれからを考える」

日本家庭科教育学会北陸地区会第34回大会との共催で、公開シンポジウムを行った。

日時：7月30日（日）13:30～15:30

場所：上越教育大学音楽棟201教室

シンポジスト：天野寛子氏（昭和女子大学名誉教授，フリー刺繡画家，家族福祉・生活文化研究所代表）

大竹美登利氏（東京学芸大学名誉教授，  
東京学芸大学特命教授）

コーディネーター：福田典子氏（日本家庭科教育学会北陸地区会2017年度会長，信州大学准教授）

なお，参加者は約30名であった。

趣旨等：〈家庭科の授業で何をつくるか〉は教師にとって悩ましい課題ではないだろうか。その時々の子どもの実態や子どもを取り巻く社会の状況を重ね合わせ、「今、この時に、この子どもに、この内容を」と考え、日々の授業を行っているに違いない。その中で、つくりたい子ども、つくりたくない子ども、つukれない子ども等、様々な状況に向き合い日々の授業を重ねているかもしれない。

このような時代だからこそ、改めて〈つくる〉をどのように考えるか、そしてどのように〈つくる〉ことを取り入れるかは、家庭科教師にとって重要なことではないだろうか。このような思いから本シンポジウムは、両氏からご講演の後、「家庭科の授業で〈つくる〉」のこれからについて皆で考える機会とした。天野氏の題目は「手仕事の可能性」であり、大竹氏の題目は「生活と〈手仕事〉と家庭科」であった。

#### 参加者の感想等（一部抜粋）

・家庭科の授業時間の少なさ、内容が多く多岐、最近の子どもの実態などを考えた際、この手仕事の重要性を家庭科でどのように生かしていったらよいのかを考えさせられました。

・“今回のシンポジウムで刺繡や家事における製作活動の作り手に対する効果について新たな知見を得ることができとを感じる。特に天野先生の発表では手仕事の10の可能性について、大竹先生の発表では新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」について特に印象的だったと感じる。

・「受容力 capability」「子どもたちに自分の手で生活を豊かにつくっていく自信を身につけさせられる」ような家庭科の授業を考えていきたいと思います。大変勉強になりました

・家庭科の授業の中でもものをつくる時数や生徒の実態等を考えるとなかなか大変なことが多く、新しい教材等がつかれないことが多い。もっと自由な発想で、考えることも大事なことだと感じた。ものをつくることの良さ、大切さを家庭科の授業ではやはり大事にしていきたい。



▲ シンポジウムの様子 1



▲ シンポジウムの様子 2

**事業 3 : ワークショップ フリー刺繍「私の街」をつくる**

日時 : 7 月 31 日 ( 月 ) 10:00 ~ 15:00

講師 : 天野 寛子 氏

会場 : 自然棟 309 教室

参加者 : 7 名

フリー刺繍の基本をいくつか教えていただいた後、それぞれが「私の街」の製作に取り組んだ。製作では物語をつくり取り組むこと、布を楽しむこと、糸を楽しむこと等を学んだ。



▲ ワークショップの様子 1



▲ ワークショップの様子 2

6 本事業で得られた  
成果

・生活と手仕事の関わりと可能性について知り・考えることができた。  
・地域における小学校、中学校、高校、大学の交流・連携の方法を検討することができた。

7 その他 (成果物等の名称)

特になし

提出期限 : 平成 3 0 年 4 月 1 3 日 ( 金 )